

34. 肺転移をきたした悪性髄膜腫の1例

安藤総一郎, 国友史雄, 金子 昇
加藤繁夫, 渡辺昇平
(千葉労災・内科)
渡辺 攻 (同・脳外科)
伊藤一郎 (同・放射線科)
今野暁男 (同・病理)

再発性髄膜腫が, 再発時病理像の悪性化を認め, その後多発性肺転移をきたした。剖検上多臓器の病変は認められず, 病理上, 悪性髄膜腫の肺転移例と診断された稀な例であった。

35. 縦隔原発と思われた Angiosarcoma の1例

松澤康雄, 内山隆司, 端迫 清
(千大・肺内)

症例は31歳, 男性。健康診断で胸部X線写真上, 上縦隔の巨大な腫瘤影を指摘された。開胸生検により, Angiosarcoma と診断され, 放射線, 温熱, ADR による化学療法 of 3者併用により, 腫瘍の縮小をみた。

36. 小田原市立病院における肺癌手術成績の検討

鈴木 実, 福田 淳, 安野憲一
有田正明, 井上育夫, 押田正規
矢形 寛, 穂坂隆義
(小田原市立・外科)

小田原市立病院1985年~1991年6月に施行された原発性肺癌切除例90例の予後について検討した。全症例の5年生存率は45.6%であった。組織型別には腺癌と扁平上皮癌の5年生存率に差はなかった。

37. 分離換気にて切除した肺癌3症例

鈴木亮二, 相楽恒俊, 杉浦敏之
林 永規 (県立鶴舞・外科)

切除予定気管・気管支断端に癌遺残の可能性のある肺癌3症例を経験し, これらに対し術中分離換気にて片側換気することで無鉗子下に可久的中枢側で気管・気管支を切離し, かつ切断端に癌浸潤なきことを確認し縫合し得た。この分離換気にはマリンクロット社製ブロンコ・キャスが有用であった。

38. 肺癌術後気管支瘻に対する大網被覆術

関根康雄, 馬場雅行, 由佐俊和
小川利隆, 斉藤幸雄, 青柳壽幸
(千大・肺外科)

3例の肺癌術後気管支断端瘻に対して大網被覆術を行うことにより, すみやかに瘻閉鎖を行うことができた。1例は左肺全摘術後4カ月, 2例は右中下葉切除後2週間で発症している。いずれの症例も, リンパ節郭清や放射線照射による気管支断端の虚血性変化が原因と考えられた。大網は血流およびリンパ流が豊富で, 血行再建による創傷治癒促進や感染に対する抵抗性を持ち, 有瘻性膿胸に対して非常に有効な治療方法と考えられた。

39. 高アミラーゼ血症を呈した肺癌の1例

黒須克志, 大島仁士, 松島保久
(松戸市立・内科)
浅沼勝美 (同・病理)
滝口恭男 (千大・肺内)

高アミラーゼ血症を伴った肺癌の1例について報告した。症例は53歳, 女性。乾性咳嗽を主訴に来院し, 胸部X線上, 右中下葉の含気の低下を認めた。血中アミラーゼは2336mU/ml, 尿中アミラーゼは7494mU/ml に上昇していた。経気管支肺生検標本の免疫染色では, 腫瘍組織内のアミラーゼの局在を証明することはできなかったが, アミラーゼのアイソザイムがS型優位であることや唾液腺や膵臓に異常が認められていないこと, 化学療法により血中・尿中アミラーゼが低下したことにより, 臨床的には肺癌による高アミラーゼ血症の出現が疑われた。

40. 放射線肺臓炎を呈した肺小細胞癌2症例の比較検討

杉戸一寿, 三上雄路, 小野寺誠
宇田毅彦, 中村 仁
(八日市場市立・内科)

照射野を越えた放射線肺臓炎を呈した肺小細胞癌2症例の背景因子について比較検討した。腫瘍側因子では, 2症例ともに下葉原発で, stage IIIA であり, 治療側因子では, 前化学療法 (CBDCA+VP-16), 照射方法, 照射線量に違いはみられなかった。しかし, 照射野, 宿主側因子の性, 年齢, 前 PaO₂ に違いがみられた。重症例は, 男性で高齢で, Brinkman index が大きく, 低酸素血症が認められた症例であった。